

中国シルクロード 第3回

素材研究 (特別編)

シルクロードの交差点・敦煌とその周辺 洗練された気品高い仏教美術を今に伝える

古代から西域に対する最前線の軍事拠点としてさまざまな民族が興亡を繰り返した地である敦煌は、また、その地を行き交った人々もたらす文化の花が、文字通り、華麗に咲き誇った東西の交差点でもありました。日本でも、小説や映画の舞台となってきた敦煌は、紛れもなく、中国シルクロードのハイライトと言わなければならない。

1000年の信仰心伝える「砂漠の大画廊」

中国西部の甘粛省にあつて、さらに、その西端に位置する



第96窟・九層樓は、北大像と呼ばれる高さ34.5メートルの大仏が坐す莫高窟の象徴的な建物



莫高窟(前期窟)第275窟に安置されている交脚菩薩像。交脚坐式は西域から伝わってきた仏像様式



莫高窟(中期窟)第57窟に描かれた観音菩薩。東洋美にあふれる艶やかさと淑やかさを醸し出す

敦煌は、砂漠の中にあるオアシスの小さな町に過ぎませんでしたが、20世紀の初めに数多くの写本や仏画を収めていた藏経洞が発見され、列強各国の探検隊が写本や仏画を持ち去ったことで、皮肉にも、莫高窟をはじめとする敦煌石窟が世界中に知られたる結果となりました。

東西交通の要衝の地として、経典を求めて西に旅する人々や布教のために東へ旅する人々が往来していた敦煌は、4世紀の頃には「村塢(村落)相属し、多く寺塔あり」と記



榆林窟東崖第2層・第25窟北壁の「弥勒経变」。故族の服を身に着けた吐蕃人も描かれており、社会風俗史的にも重要

されるほどの町になっていたと伝えられています。漢族がインドの仏教を受容して、僧たちがインド西域の仏教を求めて敦煌まで辿り着き、この地で西域の僧たちと交わって、修行のために禅定窟を造ったのが、敦煌における石窟の始まりだったのです。

1987年に「万里の長城」「故宫博物院」とともに中国で初めての世界文化遺産に登録された「敦煌莫高窟」は、東西文化の交差点である敦煌の誇る至宝と言えます。

莫高窟は北涼、北魏、西魏、北周、隋、唐、五代、宋、西夏、元などの十王朝の時代を経てきており、その長い歴史を通じて自然による浸食や人為的な破壊などによって、草創期の石窟を考証することはできなくなっているものの、紀元430年ごろに開削された北涼時代窟が存在しています。

莫高窟が世界中に知られるようになったのは、1900年5月に莫高窟下寺に住み込んでいた道教の僧侶が、莫高窟に堆積した砂を清掃中に、偶然、藏経洞(莫高窟第17窟)を発見し、そこに納められていた写本や仏画を敦煌にやってきた列強各国の探検家たちに売

ものが最も時代を遡る窟とされています。4世紀から1000年以上にわたって開削が続けられてきた莫高窟は、15〜30メートルの断崖に南北約1700メートルにわたって石窟が立ち並ぶ現在の姿となりました。



「西のかた陽関を出ずれば故人なからん」と詠まれた陽関の先には赤い砂漠が果てしなく続く

り渡したことによるものであることは、冒頭でも紹介した通りです。

1907年に初めて英国のスタインが敦煌を訪れて写本や絹画などを廉価で買い取ったのに続き、1908年にはフランスのペリオがスタインの残した絹画などを購入し、窟内の木造仏像も持ち去りました。そして、この時、ペリオは、壁画の銘文を記録して写真撮影などを行うとともに、全部の窟に番号を付けており、この番号が多くの窟を特定する手段として活用されることになりました。

その後も日本やロシア、米国などの探検隊が相次いで敦煌を訪れ、至宝の多くが国外に流出してしまいました。莫高窟をはじめとする敦煌石窟は今なお、「砂漠の大画廊」として1000年に及んだ人々の信仰の心を今に伝える貴重な存在であることには変わりありません。

敦煌石窟のハイライトが敦煌石窟であることは、ここまで見てきた通りですが、敦煌市の中心部から少し足を延ばせば、周辺地域の悠久の歴史に触れたり、西域の風を体感することもできます。

至宝・莫高窟美術を育んだ風土と歴史

敦煌観光のハイライトが敦煌石窟であることは、ここまで見てきた通りですが、敦煌市の中心部から少し足を延ばせば、周辺地域の悠久の歴史に触れたり、西域の風を体感することもできます。



鳴沙山の谷にある三日月の形をした月牙泉は、涸れたことがないという水を静かにたたえている

唐の詩人・王之渥が「春光不度玉門関」（春光渡らず玉門関）と詠んだ玉門関は、敦煌市内から西北に90キロほど、砂漠の中にある漢代の遺跡です。前漢の武帝の時代に造られたという玉門関の名は、西域原産の玉（ぎよく）がここを通過して漢の領土に運ばれたことに由来すると言われ、その付近には、玉や絹織物の交易を匈奴から守るために築かれた漢代の長城の跡なども累々と続いています。



漢に運ばれる西域原産の玉が通ったという玉門関

唐の詩人・王維が「君に勸むさらに尽くせよ一杯の酒／西の彼方陽関を出ずれば故人なからん」と詠じたことで知られていますが、その詩に込められた哀

惜と寂寥感、時を経た今も、陽関の荒涼とした景観を通じて、この地を訪れる人々の胸に迫ってきます。玉門関から90キロ南に位置することから、陰陽の思想に基づいて名付けられたという陽関の先には、「ここから西は胡人の地」と胸を詰まらせたであろう古人の思いを偲ばせるような赤い砂漠が果てしもなく続いています。少し前まで、強風の後は、周辺の砂漠から昔の兵器や陶器のかけら、古銭なども現れたという陽関は、現代から古代へと至る門でもあると言えそうです。



「万里の長城」の西端となる嘉峪関。二重の城壁と3つの鐘楼を持つ往時の姿がほぼそのまま残されている

鳴沙山と月牙泉の風景は、特に、沈みゆく夕陽によってダイナミックな陰影が生じる黄昏時が最も美しいと言われています

その鳴沙山の谷あいで静かに水をたたえている三日月の形をした月牙泉は、敦煌市の中心から南へ5キロの近郊にあるオアシスです。その水は涸れたことがなく、二帯の風景は、まるで砂漠にしたたり落ちた滴が集まり、二筋の流れとなつて注ぎ込んだかのような美しさを誇ります。



「敦煌夜市」とも呼ばれる沙州市場。衣料品や雑貨類、生鮮食品の店に加え、小さな屋台が沢山並び食堂街も

2022年の冬季五輪開催が決定 河北省は日本人旅行者の誘致強化へ

2022年冬季五輪の開催地に決定した北京。氷上競技を北京市中心部の競技場で開催し、雪上競技については北京市延慶県と河北省張家口で実施する予定です。張家口では、古楊樹跳台スキー場、樺林東スキー場、雲頂スキー場、太舞スキー場、万龍スキー場などを舞台に、スキージャンプ、クロスカントリースキー、フリースタイルスキーなどのスキー競技が繰り広げられることとなります。



華北地区で最高の天然スキー場と評価されている河北省張家口の雪山

中国国内のスキー人口は1990年代まで年間1万人程度でしたが、その後、スキーブームが到来して、10カ所に満たなかったスキー場は約200カ所まで増加し、中国のスキー人口も2500万人に達しました。このスキーブームの受け皿となっているのが河北省で、西北部に位置する張家口市の崇礼県は、降雪量が多い一方で、山地の起伏も穏やかなのに加え、風もあまり吹かないことから、華北地区で最高の天然スキー場と評価されています。

河北省では、2022年冬期オリンピックの開催決定を受けて、今年10月には訪日代表団が来日して観光セミナーを開催する一方、日本人旅行者の誘致強化に向けた観光地の整備やガイドの育成、受入施設の拡充などにも力を注いでいます。

が、満月の夜に砂丘で仰ぎ見る月の風情にも格別のものがあり、敦煌市内からも多くの人が月見に訪れているほどです。



甘肅蘭州と新疆ウルムチを結んで2014年に開通した新高速鉄道・蘭新列車

1959年に敢行された『敦煌』で作家・井上靖は、列強各国の探検隊が訪れて敦煌から持ち去った文物について、「東洋学のみならず、世界文化史上のあらゆる分野の研究を改変するまでの宝物」と記していますが、洗練された気品の高い仏教美術として残された多くの塑像や壁画とともに、莫高窟美術に代表される至宝を育んだ風土や歴史・文化も、敦煌の大きな魅力となっています。